

<p style="text-align: center;">唐津紙（1/2） ～歴史と推移～</p>	分野	産業
	<p>紙に関する一番古い記録によると、中国後漢時代(西暦105年) 宦官蔡倫が紙を発明し、和帝に献上したという文献があるとされている。しかしその後の発掘調査などで紀元前2世紀ごろには麻紙が造られていたという報告がある。</p> <p>日本には、推古天皇18年(610年)「高句麗の王、僧曇徴(ドン・チョウ)を日本に送る。曇徴は五経を知り、絵具、紙、墨等を造る」と日本書記に記されている。現在日本にある最古の和紙は、正倉院にある美濃・筑前・豊前で作られた戸籍用紙であるとされている。</p> <p>唐津の紙は、唐津藩初代寺沢志摩守の時代に農業の副業として製紙を保護育成したのが始まりとされている。水野時代になると藩の苦しい財政を救うため紙漉きを藩の事業に取り入れ、紙方役所を設置し専売制とした。藩では、まず原料の楮(こうそ) 苗を石州(島根県)から取り寄せ、上場や松浦川主流の川筋、七山方面にかけて植えさせた。その後、楮皮を畑一反に対して何把という具合に藩に納入させたのである。</p> <p>また、楮皮の買い上げと同時に石州から紙漉き職人を雇い農家の人たちに紙漉きの方法を伝習させ、半紙(京花紙。晒した紙で懐紙・鼻紙など)と白保(未晒して、障子紙・帳面用など)の2種類を製造した。</p> <p>～2/2へつづく～</p>	◎地図・写真・統計資料など
<p>◎エピソード・伝承・うんちく など</p> <p>唐津紙すき唄 世の中の変遷で、伝播されずに途中で絶えてしまった歌の一つとして「唐津紙すき唄」が収録されている。(平成18年発刊「佐賀県の民謡第2集」) 浜玉町五反田付近では和紙作りが盛んで相当有利な副業として昭和の中頃まで続いていた。和紙作りの仕事は、冬冷たい水の中で紙を漉かねばならず、夜は夜で楮などの繊維をほぐさねばならないつらい仕事だったので少しでもまぎらわせるために唄を歌った。(唄の解説から抜粋)とされている。</p>	◎引用・参考文献(出典)	<p>◆『唐津紙物語』 鶴田英雄 著</p>
	◎もっと詳しく知りたい方は	<p>唐津市近代図書館へ お問い合わせください。</p> <p>■電話：0955-72-3467</p> <p>■ホームページ： http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html</p>

唐津紙（2/2）

～歴史と推移～

～1/2からつづく～

唐津紙は、最初水のきれいな川の流域に興ったが、後に半紙は松浦川や玉島川流域に、白保は上場地方にそれぞれ紙に適した条件のもとで広がった。紙方役所では、領内で生産させた楮皮のうち上質なものを買い上げ、領内の紙漉きに賃金を払い渡かせ、漉き上がった紙を一手に集荷して大阪などの市場に送った。また、紙方役所から賃漉きに配分された楮皮も、一定の紙を漉き上げて役所に納めれば余分については生産者の収入になった。また農家は上納米を紙漉き賃に換算して納めることが出来たので、唐津紙は急速に普及し藩の重要産物の一つとなった。

しかし、藩は密売を厳しく取締り、楮や紙をかなり安く買い上げたので農民の怒りをかい、明和8年（1771年）虹ノ松原一揆の原因の一つとなった。藩の紙方役所は当初は十人町にあったが、後に水主町に移った。

明治維新になると藩政は廃止され、紙方奉行の大島小太郎氏が藩の事業を引き継いだ。それと同時に唐津紙の販売や楮の買い入れも自由となり、仲買人が活躍した。

唐津紙は、明治の初めに衰退したが、やがて塵紙として再出発し明治の後半から大正、昭和の初期にかけて内地はおろか朝鮮、満州、台湾、ウラジオストックなど極東各地まで輸出された。しかし、終戦を境に唐津紙は生産費が機械紙に比べて遥かに高いこと、紙漉き労働の大変さ、柑橘その他園芸の流行など悪条件が重なり衰退の一途を辿り、現在唐津では生産されていない。

分野

産業

◎地図・写真・統計資料など

◎引用・参考文献（出典）

◆『唐津紙物語』
鶴田英雄 著

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html